



# センターだより

令和5年3月 第135号

島根県教育センター  
[https://www.pref.shimane.lg.jp/matsue\\_ec/](https://www.pref.shimane.lg.jp/matsue_ec/)

島根県教育センター浜田教育センター  
[https://www.pref.shimane.lg.jp/education/kyoiku/kikan/hamada\\_ec/](https://www.pref.shimane.lg.jp/education/kyoiku/kikan/hamada_ec/)

## 「対話的な学び」についての一考察 ～「先哲との対話」とは？～

授業改善の取組を活性化していく視点として「主体的・対話的で深い学び」が位置付けられてから久しい。

文科省のイメージ図の中で「アクティブ・ラーニング」「キャリア・パスポート」などのいわゆるキラキラワードに混じって「対話的な学び」の中に、本を読むという活動、さらに「先哲」という古風で魅力的な言葉まで入ってきたことを国語教員の一人としてとても嬉しく思ったことをよく覚えている。恐らく、思いを持ってこの言葉を強く推した方がいるのだろうと勝手に推察している。

読書を通じて行われる対話とはどのようなものだろうか。

評論については、内容を頭の中で整理・構築していかないと読み進めることができない。これは、言葉を一つ一つ受け取りながら積み上げていく作業なので対話といってよいだろうし、「確かにそうだ」「本当にそう言えるのか」など頭の中でツッコミを入れていくことは対話の構図そのものである。

一方、小説については、面白さのあまり時間の経過を忘れて作品世界に没頭するということがある。確かにこの状態は対話しているようには感じられない。しかし、本を閉じてから、印象的な場面を反芻しつつ自分の体験に重ねたり、主題について思索を深めたりする時間がやってくる。これが小説における対話ということになるのだろう。

いずれにしても、自分が読まなければ、作者は何も語ってくれないのだから、読書は文字を媒介とした作者と読者の協働的かつ双方向の営みであることは間違いない。読書が「対話的学び」のカテゴリに入っており、自己の考えを広げ深めることをねらいとしている意味を改めて思い知らされる。

国語教員である自分は「読書の営業マン」と考えて今まで指導してきたが、残念ながら営業成績が伸びないのが実情である。もちろん、「読書大好き！」という熱烈的な「固定客」は確かに存在しており、一日に何度も図書館に足を運ぶという子どももいる。しかし、数多くのメディアが存在する現代において、本の立ち位置は決して安泰ではない。

拙稿を書くために、「読書」を辞書で引いてみたところ、「寝ころがって漫画本を見たり、電車の中で週刊誌を読んだりすることは、本来の読書には含まれない（『新明解国語辞典』）」という記述を見つけた（「新解さんもなかなか厳しいですねえ」という対話が発生）。また「先哲」というからには軽めの本ではなく、一定のクオリティを求めたいという向きもあるだろう。

ただ、きっかけはどうあれ、子どもが本を手取る習慣付けができれば、作者との対話をするようになり、自ずと深い思考につながる素地が作られていく。国語の先生方は、おそらくこの「先哲との対話」をとりわけ好んだがゆえに現在の仕事に就いておられるのであり、このことを体験的によくご存知のはずである。

高等学校学習指導要領の「国語科の目標」では、国語の資質・能力は生涯にわたるものであるという旨の記述が何度も繰り返されている。とすれば、時間がかかっても、作者と対話できる子どもを長い目で育成していくことは、きわめて重要な国語科の使命といってよいのではないだろうか。

ペアワークやグループ協議に加え、「先哲との対話」を軸とした授業に自分もチャレンジしたいと思っています（同志の皆さん、ぜひ情報交換しながらやってみませんか？）。